

健常成人における語想起能力について

新潟医療福祉大学言語聴覚学科・平沢絵里奈,
内山信, 栗崎由貴子

【背景】

語想起課題とは、特定のカテゴリーに属する単語を一定時間内にできるだけ多く列挙する課題である。語想起課題の成績は、脳損傷者で顕著に低下しうするため、本課題は言語機能の評価に有用な課題として広く用いられている。

脳損傷者に対する適切な評価を行うためには、健常者の成績について把握しておくことが必要である。健常者の語想起課題の成績については、かなりのばらつきを示すことが知られており、脳損傷者と同程度に想起語数の少ない健常者も存在しうる。また、年齢差や提示されたカテゴリーの違いによっても想起語数や産生語の内容に違いがみられる可能性がある。

本研究では、健常成人に対して語想起課題を施行し、その課題成績について検討した。

【方法】

健常成人 40 名（若年群，高齢群各 20 名）を対象とした。平均年齢は、若年群 21.1±1.2，高齢群 68.3±5.1 であった。失語症語彙検査の「意味カテゴリー別名詞検査」に用いられている 10 カテゴリー（屋内部位，建造物，乗り物，道具，加工食品，野菜果物，植物，動物，身体部位，色）についてカテゴリー別語想起課題を施行した。対象者には、それぞれのカテゴリーに属する単語を口頭で自由に産出するよう求めた。制限時間は各カテゴリー60秒とした。

得られた結果について、①年齢群間の想起語数，②各年齢群におけるカテゴリー間の想起語数，③年齢群間の産生語の内容について比較検討を行った。

【結果】

結果を年齢群・カテゴリー別に表1に示す。年齢群間比較では、10 カテゴリーすべてにおいて若年群に比し高齢群では想起語数の低下が認められた。このうち「乗り物」、「道具」、「動物」、「色」の4 カテゴリーにおいて統計学的有意差が認められた ($p < 0.01$)。

カテゴリー間比較では、両群ともにカテゴリー間の想起語数に有意な差を認めた ($p < 0.01$)。カテゴリー間の対比較の結果、想起語数が多かった3 カテゴリー「野菜果物」、「動物」、「身体部位」に比し、「屋内部位」、「建造物」、「乗り物」、「道具」、「加工食品」、「植物」の想起語数が有意に低下した ($p < 0.01$)。

産生語の内容分析では、多くのカテゴリーにおいて、高頻度に想起された語の内容や出現頻度パターンは両群で類似した。しかし、「道具」と「加工食品」のカテゴリーにおいて、若年群と高齢群での産生語の内容に相違を認めた。

両群ともに想起語数のばらつきが大きく、健常者であっても想起語数の少ない者がいることが明らかとなった。

表1. 年齢・カテゴリー別想起語数

	若年群			高齢群		
	平均	最大	最小	平均	最大	最小
屋内部位	12.2	20	4	9.2	15	2
建造物	12.0	22	3	9.0	14	4
乗り物	11.7	20	6	9.2	16	6
道具	13.1	28	6	7.0	11	3
加工食品	10.0	21	2	8.0	14	3
野菜果物	20.4	28	13	16.8	26	7
植物	12.4	18	6	10.2	18	4
動物	19.1	33	8	14.6	21	9
身体部位	22.4	34	8	19.0	31	11
色	17.1	21	13	11.0	15	7

【考察】

年齢群間比較の結果、若年群に比し高齢群の想起語数は低下していた。これは加齢により想起語数が低下するという従来の報告と一致する。高齢群における想起語数低下の要因として、動作性知能の加齢変化による語彙の検索・処理速度の低下が示唆される。また、対象者はカテゴリー別語想起の成績は、意味記憶の効率利用、認知柔軟性の2側面に加え、対象者の生活歴や生活環境が相互に影響すると考えられる。産生語の内容分析の結果、両群の産生語の内容は類似しており、想起されやすい語は加齢によって変化しないことが示唆された。一方で、「道具」や「加工食品」といったカテゴリーの語想起では、対象者の生活環境の違いや時代背景の影響を受けると考えられる。

語想起課題の成績評価の際は、一定の基準が必要である。臨床現場で最も広く用いられているカテゴリーは「動物」である。本研究の「動物」の年齢別想起語数と従来の報告での想起語数は近似の値であり、本研究の結果は健常成人における想起語数の基準になり得ると考えられる。しかし、本研究ではこれまでの報告と同じく、両群ともに被験者間の想起語数のばらつきが大きく、また想起語数の少ない者が存在した。語想起課題は言語機能の障害を反映する有用な検査であるものの、低い成績を示す健常者の想起語数は、脳損傷者の想起語数を下回る可能性もあり、課題の基準値のみから語想起能力の障害を判断することは困難であると考えられる。

臨床現場で語想起能力の評価する際は、基準値だけでなく年齢、カテゴリー、生活環境など様々な要因を考慮する必要がある。今後は、健常者と脳損傷者の産生語や誤反応パターンなどの質的側面の比較検討を行うことにより、詳細な情報が得られると期待される。

【結論】

健常者においても想起語数にばらつきが認められるため、語想起能力の評価の際には、課題成績のみではなく、年齢、カテゴリー、生活環境などを考慮して多面的な評価を行う必要がある。